

# 第11回年次大会開く

## 日本保険医学会の中道洋前会長が講演

### 日本アンダーライティング協会

日本アンダーライティング協会(八束滋代表理事)は5月17日、東京都千代田区の学士会館で第11回年次大会を開催した。会場の様子はライブ配信され、同協会の年次大会としては初のハイブリッド形式での開催となった。今回は、年次大会では初となるインシュアテック部会の発表が行われた他、講習会A、講習会Bとして、日本保険医学会の中道洋前会長(第一生命)とチューリッヒ生命の佐藤和夫医師が講師となり、保険と医療査定の歴史や腫瘍マーカーの特徴について解説した。また、2月の上級資格試験合格者の表彰式では、成績優秀者上位3人によるパネルディスカッションも行われた。当日は、会場参加者とオンラインでの参加者を合わせると、140人を超える参加者が集まった。



八束氏



中道氏



佐藤氏

最初報告を行ったインシュアテック部会は、先進的な企業へのヒアリング等を通じて、情報技術を活用したアンダーライティング領域での可能性についてより深い知見を得ることを目標に2021年11月に活動を開始した組織。現在、8社10人が所属し、原則として月に1度定例会を開催している。

講習会Aでは中道氏が「疾病・医療・保険の行方」と題して講演した。1995年に保険会社に入社し、98年から査定を始めた同氏は、当時を「紙の時代」と総括し、医学情報のソースは主に

「健康」に対する認識の変化についても触れ、1946年のWHOの健康憲章では、「健康とは、疾病がないというだけでなく、身体的・心理的・社会的に完全に満足いく状態であること」と定義されていたが、これに対してオランダの医師フーバー氏らによる国際的な研究グループが2011年に、「高齢化や慢性疾患が増えている現代において1946年のWHOの定義は望ましくない結果を生む可能性がある」との懸念を示し、新たな健康の定義として「社会的・身体的・感情的問題に直面した時に困難な状況に適応し、なんとかやりくりして対処する能力」を提唱したことを挙げ、「健康」そのものに関する意識の変化にも言及した。

「健康」に対する認識の変化についても触れ、1946年のWHOの健康憲章では、「健康とは、疾病がないというだけでなく、身体的・心理的・社会的に完全に満足いく状態であること」と定義されていたが、これに対してオランダの医師フーバー氏らによる国際的な研究グループが2011年に、「高齢化や慢性疾患が増えている現代において1946年のWHOの定義は望ましくない結果を生む可能性がある」との懸念を示し、新たな健康の定義として「社会的・身体的・感情的問題に直面した時に困難な状況に適応し、なんとかやりくりして対処する能力」を提唱したことを挙げ、「健康」そのものに関する意識の変化にも言及した。

この他、主な死因や疾病の定義の変遷を紹介した同氏は「健康の定義が変化する中でも、生命保険はできるだけ幅広く引き受けることに意義がある」と述べた。

同氏はまず、臨床検査と臨検の流し、臨床検査の結果を陽性と陰性に2分割する値であるとして、その測定法等を紹介した。

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の

## 資格試験のCBT化も報告

「健康」に対する認識の変化についても触れ、1946年のWHOの健康憲章では、「健康とは、疾病がないというだけでなく、身体的・心理的・社会的に完全に満足いく状態であること」と定義されていたが、これに対してオランダの医師フーバー氏らによる国際的な研究グループが2011年に、「高齢化や慢性疾患が増えている現代において1946年のWHOの定義は望ましくない結果を生む可能性がある」との懸念を示し、新たな健康の定義として「社会的・身体的・感情的問題に直面した時に困難な状況に適応し、なんとかやりくりして対処する能力」を提唱したことを挙げ、「健康」そのものに関する意識の変化にも言及した。

同氏はまず、臨床検査と臨検の流し、臨床検査の結果を陽性と陰性に2分割する値であるとして、その測定法等を紹介した。

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の

また、臨床検査で病期の判定や治療効果判定の



合格者代表によるパネルディスカッション

指標となる腫瘍マーカーについても、その分類と特性を解説し、最近注目されている腫瘍マーカーとして、リキッドバイオプシーを挙げた。これは腫瘍組織切除を用いることなく、血液や尿などの体液サンプルを用いて腫瘍の状態を解析する手法の総称で、標的として血中循環腫瘍DNAや、マイクロRNA、タンパク質、ペプチドや代謝産物等がある。

同氏は「今後も新しい腫瘍マーカーや検査技術が出てくると思うが、それと同時に、査定に当たって悩ましいことも出てくると思う。そういう時は一度査定から離れて、気分転換をしながら、査定医や他のアンダーライターと協力して壁を乗り越えていってほしい」とエールを送った。

21年度資格試験上級合格者表彰式では、試験委員の星子敏郎氏(住友生命)が司会を務め、合格者代表として、大豆生田実奈氏(シブラルタ生命)、長崎康一氏(JA共済連)、濱口恵子氏(かんぽ生命)の3氏が登壇した。

21年度の資格試験は、初級試験が受検者数869人に対して合格者584人、中級試験が受検者数343人に対して合格者220人、上級試験は受検者数251人に対して合格者166人となった。

代表者によるパネルディスカッションでは、資格試験を受験したきっかけや初級・中級・上級の各試験で感じたこと、上級試験が終わって挑戦したいことは、といった質問に代表者が回答した。

最後に協会事業のデジタル化の取り組みについて、講習・広報委員の岡崎真也氏(ミューン再保険)が、資格試験のCBT化について、試験委員長の柄田直之氏(トリア再保険)がそれぞれ紹介した。

コロナ禍以降、同協会では教育講習会をオンラインセミナーに切り替え実施してきた。その結果、居住地や勤務場所に関わらず、誰でもどこからでも参加できるように、参加した会員からは多くの好意的な声寄せられていた。岡崎氏は、今後も「実務に役立つ」「アンダーライターが知っておくべき」知識に限らず、幅広いテーマを取り上げていく方針を明らかにし、オンラインセミナーをはじめ、加えられる多くの人が参加できる視聴環境への対応と、安定した配信の維持に努めていく考えを示した。

柄田氏は、23年2月の試験から、資格試験をCBT化する方針であることを発表した。

これを発表したのは、この紙ベースの試験には、「試験日が固定されているため受験できないケースがある」「自然災害等により試験が延期された場合、再試験に係るスケジュール調整や再試験会場費用が別途発生する」「再試験日によっては受験できないケースがある」といった点が問題視されていた。

こうした問題を解決するため、同協会では次回試験からCBT化を実施する。CBT化によって各地のテストセンターで試験を受けることができ、試験を受けることができるようになるれば、受験者は自身の都合に合わせて受験日時と受験会場を選べるため、受験者の利便性が大幅に向上する。自然災害による試験中止や再試験にも柔軟に対応できるという。

なお、試験のデジタル化に合わせてテキストの完全ペーパーレス化も実施予定だと説明した。